

インタビュー



まきの ゆかこ
牧野 友香子 さん
株式会社デフサポ代表取締役

耳が聞こえないからこそ

言葉の大切さを伝えたい

日本における聴覚・言語障害者の数は約34万1千人で、うち聴覚障害者は29万7千人^{*1}です。しかし、口頭でのコミュニケーションのベースとなる聴覚障害者への支援体制は十分とは言えません。今回、難聴の子どもたちへの教育支援や、聴覚障害のある子を持つ親子へのカウンセリング、ウェブを活用した情報発信を展開する、デフサポの牧野友香子さんにお話を伺いました。

（インタビューア：藪本 雅子（やぶもと まさこ）：日本テレビアナウンサー、同報道局記者を経て現在フリーで活動）



藪本 YouTubeを拝見したのですが、こんなによくしゃべる難聴の人に出会ったことがないので、正直、びっくりしました。

牧野 私も、出会わないですね。今までずっと地域の中で生活してきているので、同じです。難聴は、1000人に1人、今、出生数が約81万（2021年）なので年間810人生まれるんです。

藪本 友香子さんの難聴の度合いはかなり重いつか。

牧野 重度の難聴です。生まれた時からほぼ聞こえなくて、補聴器を付けて車のクラクションが鳴れば分かりますが、人の声は音としても聞こえていないです。

藪本 読唇や発音はどこかで訓練したのですか。

牧野 読唇は、小さい頃から必要に迫られて自然に習得しました。発音は3歳から小学校高学年まで、しっかりと専門の先生から習いました。たとえば、か行なら、お茶の入ったティースプーンを舌の上に置かれるんです。そしたら、お茶を飲み込まないように、舌の奥の方がきゅっとなりますよね。それで音を出す感覚をつかんでいく。そんな訓練です。小学校高学年になると、音声言語学の理論も学んだので、発音が悪いと言われたら修正できるのがよかったです。

藪本 いい先生に出会いましたね。

牧野 友香子 さん

先天性の重度聴覚障害があり、幼少期から口話による訓練を始め、読唇により相手の言葉を理解する。地域の一般校に通いながら大学へ進学。その後、ソニー株式会社の人事として7年間勤務。同社退職後の2018（平成30）年、デフサポを立ち上げた。

牧野 今は、私たちの時代と違って重度の難聴の子は、人工内耳の手術によってよく聞こえるようになりました。だから、難聴の子の多くが地域の学校に通っています。ろう学校に行く人が減り1学年に1人しかいないとなると、多少言葉が足りなくても地域の学校を選択する親が増えていきます。ろう学校が遠すぎて通えないということもあります。

藪本 牧野さんは人工内耳を入れないのですか。

牧野 直接音の刺激を与えるので、音を聞いたことがある人には効果的なんですけど、私にはどうかな。読唇のレベルが落ちるんじゃないかなと思うと怖い。でも、家族の声を一度でいいから聞いてみたいというのはありますけどね。

●合理的配慮なし

藪本 地域の公立校に通ってみて、大変だったこともあるでしょうね。

牧野 すごくたくさんあります。私は読唇ができるので、みんなと同じぐらい会話ができると思っていたんです。ところが、小3の時、グループで話をしていた友達が、いきなり隣のグループの話題に入っていたのです。その時に、聞こえる人は、違うグループの話も聞こえるのかとカルチャーショックを受けました。

藪本 興味のあるワードが耳に入るから、聞こえるのでしょね。

牧野 私には、言葉を拾うという発想がないのです。それから、私は音がないので、ボリウム調整が難しい。バスの中で大きな声を出したら、乗客に振り向かれたりしてだんだん学習していききましたが、クラスでシーンとしている最中に友達に話しかけて、「声がでかすぎる」って、よく怒られました。私の関西弁もすごく注意されました。「気持ち悪いねん、友香子の関西弁、何かイントネーションが違う」みたいな。

藪本 さすが大阪の友達、遠慮ないですね。

牧野 全く気を遣わない対等な関係がよかったんですね。

藪本 高校受験は問題なくいったのですか？

牧野 併願で私立の高校を探していたとき、ある高校から「前例がないから特別な支援は絶対できない。どうせできない子だろうから来なくていい」と門前払いされました。初めて、耳が聞こえないことで社会的に差別される現実を知りました。それまでは、勉強ができなかったわけでもないし、友達も彼氏もいたし、楽しく過ごせていたんですけどね。それは、今でもすごく悔しい。でも、先生の方がもっと悔しかったみたいで、ぶち切れていました。「そんな学

校には行かなくていい。絶対トップ校に行け」と。結果的には天王寺高校に合格したのです。でも、合格直後「当校は、高校3年間の勉強を2年間で終わらせませう。それくらいスピードが速い学校です。配慮は基本的にしません、それでもよければ入ってください」と言われました。本当に配慮がなかったですね。

藪本 当時は合理的配慮という言葉がなかったですね。授業についていくのに苦労したでしょう。

牧野 それは中学の頃も配慮なんてないですから。根性論じゃないけど、「聞こえないなら頑張れ」なのです。「ここがテストに出るぞ」って口頭で言われても分からないので星印を付けてほしいって言ったら、「それはずるいから駄目」と言われる。教科書の該当するページ番号を黒板に書いてほしいと頼んでも、書いてくださる先生は半分くらい。授業は聞かないで、教科書を見るだけです。でも、友達には恵まれ、楽しい学校生活でした。

藪本 大学は、見事、神戸大学に進学。どんな学生でしたか。

牧野 基本、一番前の席で真面目に授業を受ける学生ではありませんでした。いかに代返をしてサボるかを考えるタイプ。その頃、先生が話していることをノートに

* 1) 厚生労働省：平成28年生活のしづらさなどに関する調査（全国在宅障害児・者等実態調査）

筆記してくれる「ノートテイク」というシステムを、学校側から利用しますかと打診がありました。それも断りました。なぜなら、私の授業に必ず要約筆記のボランティアさんが来るんですよ。ということは、授業をサボれなくなる。遅刻もできない。そんな大学生活嫌ですよ。親がこういう選択を自由にさせてくれたのもよかったです。と思います。本来なら、ノートテイクを利用しなきゃいけない雰囲気がありますからね。

藪本 授業をサボって、どんなことをしていたんですか。

牧野 友達とおしゃべりしたり、長期休みにはバックパックを背負って海外を放浪したり、スノーボードで数か月間山ごもりをしたり、ウエイクボードも好きで小型船舶免許も取りました。

藪本 わあ、やりますねえ。新しいチャレンジに不安はないんですか。

牧野 最初は怖いけれど、一回やってみたら意外に何でも大丈夫なんです。

●ソニーをやめて起業

藪本 これだけアクティブな友香子さん、ソニーに一般採用枠で入社されたのも頷けます。

牧野 一番入りたかった会社でした。人事部に配属され、結婚もして、順風満帆だったのですが、

2014（平成26）年に生まれた子どもが50万人に1人という難病だったんです。もう精神的にどん底まで落ち込んで、我が子かわいいと思えないぐらいショックでした。「聞こえない中、頑張ってきたのに何で私ばかりなんやろう。育てるのは無理」と母に言ったら「そう思ってもいいよ、障害児二人目だから私が育てるよ」と言ってくれた。夫も、「どんな選択をしても友香子を尊重するよ」と私を責めなかった。それがすごくありがたかった。その時に、ふと自分と同じ難聴を抱える子どもを持つ親のことを考えるようになりました。いろいろと調べていると、難聴という学校で手話という選択肢ばかりで、地域の学校に通っているロールモデルが表に出ていないのです。それで、私が地域で生きてきた体験をブログで伝え始めた。反響が予想以上に大きかった。2人目を妊娠して産休に入ったときに、東京と大阪でブログの読者さんを集めて、難聴の子を持つ親のニーズの引き出し会をやったんです。難聴児9割以上が耳の聞こえる親御さんから生まれてくるので「どうやって日本語を教えたらいのか分からない」という悩みがとて多かったです。私はソニーの人事部に所属していたので、最初は難聴者の就職活動を手伝おうかと思っていたのですが、

多くの難聴者は日本語が苦手なのです。耳から言葉が入らないので、外国人と同じような間違いをしたり、助詞が抜けていたりします。やっぱり、幼児からちゃんと言葉を学ばなきゃいけないと切実に思いました。それで、難聴児向けに言葉の教材を作りました。

藪本 それがデフサポですね。

牧野 はい。Deaf聴覚障害者とdeafスラングで「素敵な」を掛けて、聞こえない人が素敵な人生を送るサポートをする会社です。デフサポは株式会社です。NPOにした方が補助金を受けられるのですが、障害当事者が株式会社を経営するという一つのロールモデルがあったらいいなと考えました。事業は3本の柱があって、教材と企業講演と啓発。企業は、法定雇用率2・3%の障害者を雇うことになっていますが、現場となじめていないケースも多い。私は外部だし当事者だから、管理職の人にも、障害当事者にも言えることがたくさんあるのです。

藪本 ソニーは退職したのですよね。未練はなかったですか。

牧野 成功するかどうか分からないし、怖かった。でも、副業でできる範囲を超えていて、相談した人たちはみんな背中を押してくれました。「もしあかんかったら戻ってきたらええやん」と。だから、私にしかできないことをやる

うと思ったのです。3月にソニーを辞めて、4月に講演に呼んでいただいたのは本当に嬉しかったです。5月には、人事の先輩がつないでくださって他の大手メーカーでも講演しているんです。その実績があつたからこそ、さまざまな企業研修や講演に毎年呼んでいただけるようになりました。もう4年目です。本当にありがたいです。その収益は難聴の親子の支援に回しています。

藪本 YouTubeやネットで情報発信されていますが、どんなメッセージを伝えたいですか。

牧野 一般に難聴のイメージは「手話」だと思いますが、意外とそれ以外の手段の人の方が多い。難聴があっても外資系企業で働いている人、英語ペラペラな人、お医者さん、アナウンサー等いろんなステキな人がいることを知ってもらいたい。

●言葉があるから考える

藪本 小さい頃から言葉をたくさんインプットすることが大事なんでしょうね。

牧野 大事です。例えば、家中では「コップ」をよく使いますよね。でも、皆さんはマグカップも湯飲みもタンブラーもワイングラスもティーカップも知っている。どこかで聞いて自然に覚えている。でも、難聴児の場合は、意識して

教えていかないと「コップ」以外の言葉が身につきません。その結果、言葉が足りなくなるのです。また、日本語はオノマトペが多く、覚えるのも大変なのですが、赤ちゃん言葉で「わんわんいたね」「イヌがいたね」に移行していかなきゃいけない。

藪本 それは親が意識して言葉を変えていかなきゃ、言葉が増えない。

牧野 そうです。人間って、言葉があるからものを考えることができる。言葉ができないと、自立できないのです。役所の文書一つとっても、読むのは難しい。だから、言葉は大事。

藪本 友香子さん自身の今後の目標はあるのですか。

牧野 40歳までに英語ができるように頑張る。あと6年ありますからね。英語の読唇術ができるようになりたいので、いつか海外で暮らしてみたいんです。どうしても読唇は勉強というよりいろんな人の口を見て覚えていくしかない。

藪本 すごくですね。そのバイタリティ。

牧野 負けず嫌いなんですよね。難しい話はできなくていいから、雑談がしたい。それに、今は小学校から英語教育が始まっています。難聴児は、そこでつまづいて、中学に入る前に英語嫌いになるので

す。英語に力を入れなきゃいけないのです。

藪本 日本語も大変なのに、英語もやらなきゃいけないですかねえ。

牧野 私も日本語の力があつて、考える力さえあれば、なんとかなると思うんですよ。でも、日本の難聴児が選択肢を広げようと思つたら、大学進学した方が就職はしやすいのが現実です。英語は受験に必要なのです。難聴者の自立は当然のこと、その上で、自分の好きなことを選択できる人生が送れるようにするのが私の一番の目標です。



牧野さんと藪本さん

●デフサポ

<https://nannchou.net/>



●YouTube

デフサポちゃんねる

<https://www.youtube.com/defsapo/>

